國學院大學学術情報リポジトリ

It is Orikuchi Shinobu's study meeting "Nihongi-no-kai"and Nihonshoki research of him

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡邉, 卓
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002032

折口信夫の「日本紀の会」と『日本書紀』研究

渡邉　卓

要旨

折口信夫が戦後に開いた「日本紀の会」における講義内容から、折口の『日本書紀』解釈を検討した。そこには、折口の直感による本文校訂や折口の「まれびと」論から生じた訓読など、折口独自の新解釈が確認された。「日本紀の会」の講義において折口は、文献を超えた新たな視点を設けたことによって、従来の研究史にとらわれないものであった。それはたとえ仮説であったとしても、折口の信念と知識に裏付けされた説とみることができる。また折口の解釈である「まれびと」観は、同世代の武田祐吉の『日本書紀』研究にも影響を与えていた。折口は文献を扱いながら、文献の範疇を超える視点を有していたのである。

キーワード

折口信夫、『日本書紀』、武田祐吉、まれびと、仮名日本紀

一、はじめに

国文学者であり民俗学者である折口信夫は、國學院の出身であり、國學院大學教授や慶應義塾大学教授を務めた。また釈迢空というペンネームで歌人としても活躍したことで知られる。折口の学問は、戦後の国文学研究に大きな影響を与え、時として「折口学」とも称され、民俗学を中心としながらも幅広く展開した。折口の研究対象は、分野や文献によって細分化されたものではなく、「古代」そのものを対象とした総合的研究であり、その成果は今日も『折口信夫全集』などによって示されている。

その折口信夫の学問・研究については、折口の論理構築や、折口自身の体験などに焦点が当てられ論じられている傾向にあり、これまでも様々な折口観・折口論・折口像が論じられてきた。このような研究は、確かに「折口学」追求のためには重要な視点であるといえる。しかし折口の学問の基盤には、具体的な文献や民俗の研究があったことは言うまでもない。したがって、折口の学問を検証するためには、まずは折口が扱った個々の文献や民俗を丹念に見ていく必要があろう。具体的に折口が扱ったものを見ることは、折口の方法論を明らかにすることへとつながり、「折口学」の過程を窺うことが出来ると考える。

折口信夫は研究者として、武田祐吉と比較されることがしばしばあるが、これは折口と武田が旧制中学からの同級で、互いに國學院大學教授となったことによろう。武田は主として文献学的方法を用いて研究を行い、研究対象は散文・韻文を問わず、時には他時代の文献も研究している。武田は特に『万葉集』の研究においては評価が高く著名である。[1] 折口も同様に、古代を考える上で重視したのは古典文学作品であり、とりわけ上代の文学作品には折口の論拠となっているものが多い。『万葉集』に関しては『口訳萬葉集』『萬葉集事典』などの著作も見られる。だが、武田には散文である『古事記』『日本書紀』に関する論考が見られるのに対し、折口はそれらを正面から取り上げたものはあまり見あたらず、武田とは異なった一面といえる。

しかし、『折口信夫全集』ノート編には「日本紀」として、折口の『日本書紀』講義がまとめられており、折口の『万葉集』以外の注釈活動の様子が

窺われる。内容は神代紀から垂仁紀七年までであり、訓読・口語訳・語釈がまとめられている。あくまで、これは折口の講義ノートであり著作ではないが、折口信夫の上代散文研究を考える上で、重要な手がかりとなる。そこで本稿では、折口の『日本書紀』講義を通して、折口の『日本書紀』研究の態度を明らかとし、折口の学問を検証したい。また検証した結果を踏まえ、折口の学説が与えた影響についても考えることとする。

二、「日本紀の会」

『折口信夫全集』ノート編の第八・九巻[2]に収められている『日本紀』は折口の散文への研究態度を知る上で重要な資料といえる。このノート編の『日本紀』は、昭和二十一年五月二十五日から二十六年十二月二十五日までの間、折口の自宅で行われた「日本紀の会」での筆記ノートを編集し纏めたものである。「日本紀の会」については、『三田の折口信夫』[3]に次のように纏められている。

付　日本紀の会

昭和二十一年五月から昭和二十七年一月まで三十六回にわたって「日本紀の会」と称せられた会合での折口信夫の講義がある。この会はもともと、戦後再び弟子たちが多く集まるようになって、面会日というべきものを決めようということになったとき、折口信夫がせっかく皆が集まるのならば何か読んであげようと言い出し、折口春洋の研究を記念して『日本紀』の講読ということになり、会の名も「日本紀の会」と呼びならわされた。しかし、実際には『日本紀』の講義が三十六回のすべてに行われたわけではない。第七回の昭和二十二年一月二十六日からは『万葉集』の口訳を合わせ行うようになり、そのおりの健康状態などから、時々『万葉集』の口訳だけで終わることもあった。『日本紀』の講義としては昭和二十六年十二月十五日が最後で、二十七年一月七日には河出書房の『日本古代抒情詩集』のための講義がそれに代えられた。

このように、「日本紀の会」は、折口の養子となった藤井春洋の研究を記念して発足したのであった。しかし、活動内容は『日本書紀』の講義に限定されるものではなく、『万葉集』の口訳などにも当てられていた。また折口の健康具合によっては、当日の活動も様々であったようである。昭和二十一年は敗戦の翌年であり、折口は五十九歳であった。昭和二十七年まで会が続いたということは、折口の最晩年まで会が存続していたということである。昭和二十七年一月以降、会が開かれなかったことは、折口の体力の衰えを物語っているともいえる。この「日本紀の会」については、ノート編第八・九巻の月報にある「あとがきの周辺」[4]にも次のように記されている。

戦後、先生の周囲は、折口春洋氏の戦死により寂寥をきわめ、しかも、反対に、世間的には、先生はますます重い存在となり、先生の意に添わぬ人の出入りによって、先生の静閑が阻害されることが多くなった。そこで、昭和二十一年、戦時中より身辺にあった、石上堅・米津千之・今井武志、一月以降、つぎつぎに復員した、池田弥三郎・荒井憲太郎・高崎英雄（伊馬春部）等が相議って、出石における面会日を定めることになった。当時はまだ藤井貞文氏は未帰還、加藤守雄は消息不明のままであった。ところが、面会日というだけでは先生は満足せず、せっかくみなが集まるならば、何か、特別に講義をしよう、ということになった。そして、折口春洋氏を記念して、テキストに、日本紀を選ぶことになった。

第一回は、二十一年五月二十五日午後三時より。わたしの記録によると、「天候、雨　時々豪雨」。会する者を記すと、

高崎英雄・石上堅・米津千之・今井武志・荒井憲太郎・橘誠・宮川淳・鈴木正彦・目崎正明・岡野弘彦・池田弥三郎

であった。そして、会の名を仮に「日本紀の会」として、近い将来に春洋氏を記念して、名を決定することにした。

ここから、戦後の折口を取り巻く環境や、春洋の死が与えた精神的影響が大きかったことが窺われる。ここに「わたしの記録」として池田弥三郎の日記から引用がみられるが、池田の日記には「日本紀の会」第一回の参加者について、次のような言及がみられる。[5]

昭和二十一年

五月二十五日　三時から「日本紀の会」第一回。この出席者は、十一名。十一名中、私を除いて、全部国学院の出身者。（以下略）

この時は折口は既に慶應大学の教授であったが、第一回「日本紀の会」の参加者の多くは國學院大學の人間であり、「日本紀の会」における活動に学閥は関係なく、折口の門人たちが集まっていたことがわかる。[6]

ノート編に収載された「日本紀の会」の講義は、國學院出身の石上堅のノートがもととなっている。ノート編第八巻「あとがき」には、

本巻は、石上堅が、池田のノートを参照して、作成したものであって、本全集企画以前に、すでに詳細な草稿が出来上がっていた。本文（『増補六国史』朝日新聞社蔵版）、その校異、『仮名日本紀』、その訓注、旧訓とその注、正訓（折口信夫の訓読）、その注、語釈、その他、という整然とした成稿で、二千五百枚に達していた。それを、本全集に収載するにあたり、量の削減のため、やむをえず、組織を簡にしたのが本稿である。本文は削除し、『仮名日本紀』は必要最小限にとどめて、多くを削除し、その部分の注は、語釈の中に組み入れた。それらの作業は池田が行ったが、しかも全部を第八巻一巻に収められるまでには縮小しきれず、一部は、第九巻につづけて収載した。

このように、ノート編編纂の経緯が述べられている。このあとがきには、ノート編に収載された「日本紀」は、全集刊行以前に出版される予定であったことが記されている。このことについては、ノート編第八巻の月報に「二十年むかしと今」として石上自身も述べているところである。[7]

先生が亡くなられてから、当時、折口記念会長であった西角井正慶さんが、二十万円の費用を出すから、助手を使ってなりして、是非とも纏めてほしいと懇望された。私は、劇務の隙隙をぬすみ、夏はまい夏、新鹿沢の安い旅館に閉じこもるなど、血みどろな苦しい編纂を続け、ようやく二千五百枚に書きあげて、その約束をはたした。もちろん、費用の支出は、全くうけなかった。

石上が仕上げた原稿は、高崎正秀が尽力するも、膨大なものゆえ、出版には至らなかった。この月報の記事には、出版された暁には掲載される予定であった「あとがき」が転記されている。その冒頭には、

○本書は、先生の大学御講義の速記ではなく、出石の御宅二階で、門弟子に、晩年の御秘伝を傾けられ、五年間、特に講ぜられたものです。

○本書は、かく整うまでに、まる四ヵ年の日子を費しました。

と、書き始められている。この他「あとがき」には「日本紀の会」が発足した状況について記されている。石上は『出雲国風土記』をやりたかったが、折口が「春洋の、追悼として、『日本紀講筵』をしよう」といったことや、「日本紀の会」で石上が毎回、池田弥三郎のノートを借り、次回までに照合整理を続け果たしたことなどが記されている。この「あとがき」は、「先生七年祭能登墓参のち」に書かれている。折口は、昭和二十八年九月三日に没しているので、七年祭とは昭和三十五年のことであろう。この頃に、本来であれば折口の『日本書紀』研究が世に出ていたことになる。

三、折口の論証

折口の『日本書紀』研究の態度は、「日本紀の会」という名称が示すように、『日本書紀』を『日本紀』という書名として扱っていたことが、先ず指摘できよう。これは、雑誌『史学』に掲載された「日本書と日本紀と」[8]に代表される意見である。折口はこの論の中で、

てつとり早く結着を申すと、私の考へでは「日本書紀」は誤りである。「日

本紀」が正しい稱へだと言ふ事におちるのである。

と述べている。この説の論旨は、先ず漢籍で「紀」という型があったことを指摘し、前漢書や後漢書ではなく、前漢紀とか後漢紀というべきものが日本へ渡来したと推理した。紀伝道と称される、歴史学習の学問が成立したことも関係するという。また、『続日本紀』に「日本紀を修む」と明記されていることの確認から、漢書から漢紀が発生したように、「日本書」なるものがあったのではないかと疑問を呈し、正倉院文書に「帝紀二巻日本書」とあることを指摘した。そして、正史として「日本書」を編修することになったときに、「帝紀二巻」が独自に整えられて、「日本紀」となったと論じている。それが、平安初期弘仁時代あたりの博士らにより、「書」「紀」が区別できず「日本紀」を「日本書紀」として命名されたと述べた。

この「日本紀」と「日本書紀」の問題は、近世に伴信友『日本書紀考』で「日本紀」が本来の名であるとしてから争点になっており、今日もなお解決できていない問題である。この折口説に対して、坂本太郎は、

書と紀との相違をしっかりと把握した上での独創的な見解であるが、七世紀頃のわが知識人の間に、日本書という雄大な構想が立てられて実行されたかどうかは、頗る疑問としなければならぬ。しかし日本紀が本名で、日本書紀は博士たちの一知半解の物知り顔から起こった名というのは、信友の言い足りなかったことを説明したものとしての意義が大きい。

と評価する[9]。この論文には、折口特有の直感的な論理構築はなく、考証学的に論じられていることは注目に値する。だが一般的には、折口の論証は直感的な洞察や、論理を飛躍させることによって、物事の本質を見いだす特徴が認められている。『日本書紀』の注釈活動にも、直感的な注釈と根拠に裏付けされた注釈の両方が確認できる。

まず先に引用した、石上の月報を手がかりとして、具体的に折口の注釈姿勢を考察したい。月報の中に次のような指摘がある。

先生はつねに、古書・古注などで、判然と誤謬であると認められるものは、遠慮なく訂正しておくことが学問的であるとされ、諸本に「宇介能美拖磨」とあるのを、「宇个能美拖磨」と正された例にならい、相当な箇所をあらためておいた。

この記述によると、折口は古書・古注によって本文を改めた場所が相当あるという。この「宇介能美拖磨」は、神代上第五段一書第七にみられる「倉稲魂」の訓注箇所である。では、石上の月報に導かれながら、ノート編「日本紀」の折口の注釈を見てみる。

倉稲魂、此を宇介能美拖磨と云ひ　この古注「宇介」の「介」は、まちがっている。「介」はカイで、カは「个」の字なのであるが、そうなっている本はないようだ。カのためには「个」がよいのである。

石上の月報には「古書・古注など」によって改めたとするが、注釈の方には根拠らしいものは明記されていない。むしろ、「そうなっている本はないようだ」と、諸本には用例がないことを述べており、折口の直感によって導き出されたと感じられる。だが、この文字の異同について再検証してみると、折口の指摘は誤っているとも言い切れない。『校本日本書紀』[10]に拠ってこの箇所の校異を確認してみると、「介」を「个」とする諸本が確認できる。「个」とするものは、兼夏本・内閣文庫本（左小字「介」）・長仰本・両足院本・阪本本（小書）である。折口は「个」とする本がないと述べているが、兼夏本を筆頭に「个」とする諸本が現存している。この当時は、諸本を確認することは非常に困難な時代であったことは間違いなく、折口も兼夏本はもちろん写真版などを目にすることも無かったであろう。しかし、折口は直感で本文校訂の可能性を示唆しているのである。

この「介」と「个」の問題は、さらに別の問題を含んでいる。「介」は一字一音の万葉仮名「か」として用いられているが、上代文献の中で万葉仮名として「介」を用いているのは『日本書紀』のみであり、「介」が「个」であるとすると、「介」という万葉仮名は存在しなくなってしまう。『日本書紀』講義の中で折口は、これ以降も万葉仮名として用いられている「介」をすべ

て「个」に改めている。この指摘は、確固たる根拠は見いだせないが、文献的にも決して誤りと言い切れない、折口の直感によって導かれた理解といえる。

折口の講義の中では『日本書紀』本文が度々変更されている。例えば、同じく万葉仮名を用いた訓注に、「飄掌、此をば陀毗盧箇須と云ふ。」という箇所が神代下の第十段一書第四の異伝にみられる。これに対して、

舟がユサユサすることを、カヒログという。手をそのごとくにすることを、タヒロカスといったのか。このような紀の古注は、日本語についての知識の少ない博士たちの仕事ゆえ、正確ではない。

と述べ、既に『日本書紀』の訓注として本文に取り込まれているものも、博士家達の古訓が入り込んだものとして一蹴している。これも根拠は明らかではないが、折口は本文に取り込まれている古訓すらも、あまり尊重しない態度であったようである。

四、折口の訓読と「仮名日本紀」

では、『日本書紀』講義の折口の訓読態度はどのようなものであったのであろうか。次に折口の『日本書紀』の訓読態度を検討したい。まずはじめに、國學院雑誌における対談での折口の発言を引用する。[11]

折口　此から輪読の題目にします日本紀の本文の訓み方は、出來るだけ漢文訓みで行つた方が本道ぢやないかと思ふ。ぜひとも國文脈で訓まねばならぬ場處は、ちやんと本文自身にその用意がしてあるのですから、そこはなるべく純國語式に訓むといふ風にして。

この発言が示すように、折口信夫は『日本書紀』は漢文訓で訓むことを本道と考えていた。この姿勢は、「日本紀の会」の講義においても同様であり、『日本書紀』の訓みについては、次のように述べている。

朝日新聞社刊『六国史』本など流布本の訓は、できるだけ日本風にくだいて訓んである。また、日本紀の本文の脇につけてあった訓を、独立させたものもある。すなわち、日本紀の原文、あるいは原文系統のもの、それに漢文の脇に訓み方をつけてあったもの、訓み方の部分のみ独立させたものと、こう三種がある。

今日行なわれている日本紀の本文は、このうちの二つを合わせた形で、漢文であって、しかも独立した仮名を、合わせてつけていくという形。もう一つの仮名のみのは、「仮名日本紀」という名で、幾種か伝わっている。そのうちの普通の本は、植松安氏が校訂して、上下二冊で出版した『註釈 仮名の日本書紀』である。植松氏のだけがそう呼んでいるのであり、普通は、『仮名日本紀』というべきものである。今、見本として植松氏のものを掲げ、それに対して、漢文のままに訓むわたしの訓みを示してみる。それを普通の本の訓みと較べてみてもらいたい。

流布本の訓を折口は「日本風にくだいて」あるものとしていた。先に引用したノート編のあとがきと重複するが、「日本紀の会」では朝日新聞社刊『六国史』[12]が基本のテキストとして用いられており、それと併用する形で植松安の『註釈 仮名の日本書紀』[13]が用いられていたようである。折口が指し示すように、『仮名日本紀』と折口の訓みとを比較してみる。

［仮名日本紀］

いにしへに天地いまだわかれず、陰陽わかれざるとき、揮沌たること鶏子のごとく、溟涬て牙をふくめり。その清み陽らかなるものは、たなびいて天となり、かさなりにごれるものは、淹滞て地となるにおよんで、精しく妙なるがあへるは、搏ぎやすく、重り濁れるが凝たるは、竭りがたし。故、天まづ成て地後にさだまる。しかうしてのちに神聖その中に生ます。故、いはく開闢はじめに洲壌のうかれ漂へること、たとへばなほし游魚の水上にうけるがごとし。時に天地の中に一物生り状葦牙のごとし。すなはち神となる、国常立尊と号す。（至つて貴きを尊といふ。これよりあまりを命といふ。ならびに、みこと、いふ、下み

なこれにならへ。）次に国狭槌尊、次に豊斟渟尊、凡てみはしらの神ます。乾道ひとりなす。このゆゑにこの純男をなせり。

［折口訓］

古、天地未だ剖れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること鶏子の如く、溟涬して牙を含めり。其の清陽なる者、薄靡して天と為り、重濁なる者、淹滞して地と為るに及んで、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定り、然る後に神聖其の中に生ず。故に曰はく、開闢の初、洲壌浮び漂ふこと、譬へば游魚の水上に浮けるが猶し。時に天地の中に一物を生ず、状、葦牙の如く、便ち化して神となる。国常立尊と号す。（至貴を尊と曰ひ、自余を命と曰ふ、並びに美挙等と訓ず、下皆此に倣へ。）次に、国狭槌尊、次に豊斟渟尊、凡そ三神なり。乾道独り化す。ゆゑに此の純男をなす。

この訓読文を比較してもわかるとおり、折口の訓読文は漢字をそのままに訓んでいる。この漢字をそのままに訓でいく折口の態度は、一見すると『日本書紀』の講筵にはじまる訓読の歴史を否定しているようにも見受けられる。しかし、折口は講筵については、

伝説を土台として系統づけていけば、日本紀ができた翌年の養老五年に、第一回に本紀講筵が行なわれている。このことを信ぜぬ人がいるが、信じぬのはいけぬ。国史が編纂されたときには、それを訓んで講義して聞くというのは、当然なのである。天子、皇族、貴族、役人などの身分のある者に聞かせるのがあたりまえで、聞かせるために編纂されたのであるから、講筵があったのは疑われぬことだ。これが『養老私記』であり、『釈日本紀』の中にある。この『養老私記』のできたときに、同時に読まれた日本紀の訓みが本筋になり、しだいに改められたのが、各種の『仮名日本紀』の訓みなのである。

として、講筵の存在は肯定し、講筵から訓読文が発生したことは認めているようである。しかし、折口は次のように続ける。

ただいまのでは、どこまで養老のものを伝えているかわからぬ。平安朝どころか、奈良朝ばなれした訓み方もあるゆえ、独立している単語の訓み方は、時代的だが、句、文の訓み方のうえに、日本的のものをみるのは、無理である。それは動脈硬化となっており、漢字は、熟語のものほど多い。日本語は、漢語と妥協して訓めぬ。直訳の訓み方にもならぬのであるし、純粋な日本の訓み方でいうと、不自然なものになる。

このように、今日伝わる『仮名日本紀』の訓読が奈良朝の訓読としては考えられないと折口は述べるのである。確かに、今日伝わる「仮名日本紀」の諸本は、平安朝までも遡ることは出来ず中世から近世の成立にかかるものが多い。[14] 折口は講筵に始まり、『日本書紀私記』や『釈日本紀』といった先行する訓読を軽視していたわけではなく、講義に用いた「仮名日本紀」の訓読が、完全に『日本書紀』成立時の訓みではないため、漢字をそのままに読んだのである。つまり折口は、講筵の記録や古写本といった文献に残された訓読に信頼を置いていなかったに過ぎず、訓読をしないからといって、決して日本的なるものを排除しようとしていたのではない。折口は訓読文に左右されない日本的なものを『日本書紀』に想定していたと考えられる。

その証拠に、「仮名日本紀」の訓読を必ずしも講義の中で否定してはいない。

この条の『仮名日本紀』訓みも、苦労して訓んでいるが、とんでもない訓み方をしている。しかし、現在でも、紀の訓みは、こうした訓み方から離れるとわからなくなる。

この注記のように、訓読文を否定しながらも訓読文が存在しないと『日本書紀』の内容を理解することが難しいことも述べている。「この条の『仮名日本紀』訓みは、すべてよく訓んでいる。読んでいて快い。」や「この『仮名日本紀』訓みは、上手。この訓み方の技巧はすぐれている。」といった注も見られ、「仮名日本紀」の訓読に肯定的な態度も示している。

「日本紀の会」において、漢文体で書かれた『日本書紀』をそのままに訓む折口の姿勢は、訓読することで漢語の意味を理解していた訓読史とは、一

線を画していたといえる。講筵に始まったとされる『日本書紀』の訓読史は、訓読することによって内容を理解しようとするものである。つまり、訓読作業は注釈活動の一環として行われてきたともいえる。しかし、折口は注釈と訓読とを別け『日本書紀』を考察しようとしたのである。そのために、標準的な漢文訓みを行っても、注釈においては「仮名日本紀」の訓を肯定することもあったのであろう。

五、まれびと訓

「日本紀の会」においては、漢文的な訓みをしながら『日本書紀』の講義を進めていた折口であるが、折口の訓みを眺めると、標準的な漢文訓みの範疇には収まらない折口の特徴的な訓が見受けられる。折口の学問には「折口名彙」と称されるキーワードがあり、その代表的なものが「まれびと」である。まれびととは、時を定めて他界から訪れる霊的存在のことであり、折口の学問大系の骨格を形成する語として理解されている。この「まれびと」が『日本書紀』の訓読にあらわれているのである。折口は『日本書紀』巻第二第十段本文の海宮遊幸章にある「有一希客者」を、「一の希客者有り」と訓読している。これについて対応する語釈では、

「希客者」は、マレビト。来客者であり、マレビト神である。

と述べている。この訓読は、明らかに折口の「まれびと」論が反映された上での訓読である。「まれびと」論そのものについての論考は他に譲るとするが、「まれびと」訓が『日本書紀』訓読にあらわれたことについては、折口が想定する「古代」との関わりについて考える場合に、重要な手がかりとなろう。奈良朝まで遡れない訓読はとらないとする折口であるが、「まれびと」訓は文献成立時にあった言葉として考えているようである。[15]

客をまれびとと訓ずることは、我が國に文獻の始まつた最初からの事である。從來の語原説では「稀に來る人」の意義から、珍客の意を含んで、まれびとと言うたものとし、其音韻變化が、まらひと・まらうどとなつたものと考へて來てゐる。形成の上から言へば、確かに正しい。けれども、内容―古代人の持つてゐた用語例―は、此語原の含蓄を擴げて見なくては、釋かれないものがある。

折口は初期の学問的業績であり、主著にも位置づけられる『古代研究』のなかで、このように述べている。文献が始まった最初から「まれびと」という訓があったとする折口は、マレビトが「まらひと」「まらうど」と音韻変化したと説明している。そのため、『日本書紀』の「稀客者」を漢文のようには訓まず、「まれびと」と訓読したのである。この第十段本文にみられる「客」と同様の用例は、一書第一にも見られる。一書第一には「有一貴客」「客是誰者」「在此貴客」とあるが、折口は「一の貴客有り」「客」「貴客」と訓読している。そもそも、第十段本文と一書第一にあらわれる「客」とは、すべて海宮を訪れた彦火火出見尊のことを指している。彦火火出見尊は天つ神であり、アマテラスの系譜に連なる神である。この彦火火出見尊を見た美しい人が、その父母（一書第一では父）に報告するときに「客」として表現しているのである。折口の口訳をみると、第十段本文は「珍しい人」と訳されているが、一書第一ではより積極的に「一人のまれびとが来ております。」とそのままに訳している。一書第一の口訳では、『日本書紀』本文に「客」は用いられていなくても主語として「まれびと」を補い口訳を整えている箇所も見受けられる。第十段本文よりも一書第一の方が「まれびと」としての解釈が際立っている。

折口は「まれびと」について次のように定義づけている。[16]

まれと言ふ語の溯れる限りの古い意義に於て、最少の度数の出現又は訪問を示すものであつた事は言はれる。ひとと言ふ語も、人間の意味に固定する前は、神及び後継者の定義があつたらしい。其側から見れば、まれびとは来訪する神と言ふことになる。

海宮を訪れる彦火火出見尊は、この定義に基づいた存在として解釈されてい

たのである。しかし、海宮遊幸章には、一書第四にも「客」の用例がみられるが、「まれびと」とは訓読されていない。本文と一書第一と同様に、海宮を訪れた火折尊（彦火火出見尊の亦名）が「一客」として表現されているのであるが、訓読文では「一客（いつかく）」と漢文読みになっており、口訳でも「一人のお客」とされ「まれびと」とは解されていない。どのような条件に基づいて「客」を「まれびと」として訓読し解釈していたかは、不明な点もある。しかし、「客」を「まれびと」と訓読し、彦火火出見尊を「まれびと」と解釈する態度は、折口独自の解釈から発生したことは間違いない。

そもそも厳密に「まれびと」という用語を、古典作品などには見いだすことはできないが、「まれびと」もしくは「まれびと神」という用語自体は折口の創出ではないことが池田弥三郎によって指摘されている。[17] 折口も「まれびと」を説明する際に引用している『仏足石歌』には、「まらひと」なる語は認められる。[18]

久須理師波　都弥乃母阿礼等　麻良比止乃　伊麻乃久須理師　多布止可
理家利　米太志加利鶏利（薬師は　常のもあれど　賓客の　今の薬師
貴かりけり　賞だしかりけり）

この「麻良比止」のマラがマレの音韻交替形と見られている。『和名類聚抄』にも「賓客」を「末良比止」としている。また『古今和歌集』には、

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり（六十二）

という例があるものの、「まれびと」「まらひと」といった用例を、折口が示すように上代まで遡らせることは現状ではできない。[19] したがって、折口の訓読論に従うのであれば、養老の訓読に遡れないのであれば漢文読みをすべきであろう。

折口は『日本書紀』の「客」を「まれびと」として解釈したが、もちろん『日本書紀』の「客」を「まれびと」と訓読する古写本はなく、「まれひと」や「まらうと」という訓が付されている。現行の諸注釈書の訓読も、底本とした諸本の訓に従うものが殆どである。しかし、折口と並び称される武田祐吉が手がけた『日本書紀』の訓読文は諸本とは異なり、「客」を「まれびと」と訓読する箇所が多いことが指摘できる。武田が手がけた『日本書紀』全巻の訓読文は、昭和七年の『国文六国史』と昭和二十三年の『日本古典全書日本書紀』があるが、[20]『日本書紀』には七十四例の「客」のうち、『国文六国史』では三十六カ所も「まれびと」と訓読している。『日本古典全書』では訓が付されていない箇所もあるので、『国文六国史』ほどの数は確認できないが、大凡は「まれびと」訓で通されている。これは、折口説の影響と見て間違いなかろう。武田祐吉は、『日本書紀』本文を「純粋な国文」に近づけようと漢文読みを避け、古い語法に則って訓読文を作成している。[21] この態度は、漢文読みをとった折口とは正反対の態度である。しかし、その武田の訓読文に折口の「まれびと論」の影響が認められるということは、「まれびと」なる訓は、和語として武田は認知していたということになる。折口の「まれびと」訓は、「日本紀の会」の中だけで通用した訓読ではなく、同世代の武田にも認められた訓読であったのである。

六、おわりに

本稿では、「日本紀の会」における折口の『日本書紀』講義による解釈を検討した。そこには、折口の直感による本文校訂や折口「まれびと」論から生じた訓読など、折口独自の解釈が確認された。しかし、それらは一概に独創的な仮説とはいえず、新たな解釈として考えられるものであった。折口は、『古代研究』の「追ひ書き」において、自己の研究について次のように述べている。

我々の立てる蓋然は、我々の偶感ではない。唯、證明の手段を盡さない發表あるに過ぎない。世の論證法も、一種の技巧に過ぎない場合が多い。ある事象に遭うて、忽、類似の事象の記憶を喚び起し、一貫した論理を直觀して、さて後、その確實性を證するだけの資料を陳ねて、學問的體

裁を整へる、と言つた方式によらない學者が、ないであらうか。（中略）だから、立證すべき信念と、その土臺となる知識の準備とを、信頼して良い學者の立てた假説なら、その解釋や論理に、錯誤のない限りは、民俗學上に、存在の價値を許してよいと思ふ。これを更に、必然化する事は、論者自身或は、後生學者の手でせられてもよいはずである。

このように、「日本紀の会」における折口の講義も一見すると「証明の手段を尽くさない」解釈のように思われる。しかし、折口は『日本書紀』という文献資料の中に古代を求めながら、文献を超えた新たな視点を設けた結果、折口の独自説として講義にあらわれたのである。その端的なものとして、それまでの訓読史にとらわれない折口の「まれびと」訓があったのである。新たな視点から発信された折口の学説は、たとえ仮説であったとしても、折口の信念と知識に裏付けされたものであったのであろう。「日本紀の会」での、『日本書紀』解釈は、「追ひ書き」で述べられるように、今日、再検証することで真価が認められるものである。

本稿で、明らかとなったのは折口信夫の『日本書紀』解釈の一部である。当時の文学研究を折口が牽引していたと言われるように、折口の学説が、他の研究や研究者に与えた影響は大きい。「まれびと」訓は、同世代の武田祐吉にも影響を与えていた。折口は文献を扱いながら、文献の範疇を超える視点を有しており、従来と異なった視点は、本稿で明らかにしたもの以外に『日本書紀』の中に認められるはずである。これまで、折口の『日本書紀』研究には視点が当てられてこなかったが、折口の論考や学説には『日本書紀』が根拠となっている場合が多く、今後さらに折口の『日本書紀』研究や解釈を明らかにする必要があろう。

註

（1）武田祐吉は、『萬葉集全註釈』に代表されるように『万葉集』関連の著作が多く、昭和二十五年には万葉集校訂の研究及び万葉集研究に対して、日本学士院賞が授与された。

（2）『折口信夫全集　ノート編』第八・九巻（昭和四十六年、中央公論社）。第八巻には『日本書紀』巻第一～三、第九巻には巻第四～六までが収められる。第九巻には「日本紀」の他に、祝詞・神功皇后紀輪講・万葉集巻四口訳が収められる。

（3）池田弥三郎編集『三田の折口信夫』（昭和四十八年、慶応義塾大学国文学研究会）所収、「折口信夫　講義講演目録（三田関係）」大正十二年―昭和二十八年に拠る。

（4）池田弥三郎「あとがきの周辺」14・16（『折口信夫全集』ノート編 第八・九巻あとがき、昭和四十六年十・十二月、中央公論社）。

（5）池田弥三郎『まれびとの座』（昭和三十六年、中央公論社）に拠る。池田の日記には、第一回以外の「日本紀の会」についての言及も見られる。例えば昭和二十六年六月二十三日には、「日本紀の会だが、日本紀の講義をやめ、先生は寝たまま口訳万葉。」とあり、「日本紀の会」の活動と折口の健康状況を記すものある。

（6）「日本紀の会」は以下の日程で開催された。

昭和二十一年
五月二十五日　六月十五日　七月四日　七月二十日　十月六日　十二月十四日
昭和二十二年
一月二十六日　二月十五日　三月八日　四月二十六日　六月七日　七月六日
十月十七日　十一月二十九日
昭和二十三年
二月十四日　三月二十日　五月二十九日　七月十日　十月九日　十一月二十一日
十二月十八日
昭和二十四年
一月二十九日　四月二十三日　十月十五日
昭和二十五年
二月十八日　五月二十一日　七月一日　十月十四日　十二月二日
昭和二十六年
一月二十八日　二月十七日　五月三日　六月二十三日　十月二十七日
十二月十五日
昭和二十七年
一月七日

（7）石上堅「二十年むかしと今」『折口信夫全集ノート編』第八巻月報（昭和四十六年十月、中央公論社）。

（8）折口信夫「日本書と日本紀と」『史学』第五巻第二号（大正十五年六月、慶應義塾大学文学部内三田史学会）。後に『古代研究』第二部　国文学篇（昭和四年、大岡山書店）に収められる。

(9) 日本古典文学大系『日本書紀』解説（昭和四十二年、岩波書店）。
(10) 國學院大學日本文化研究所『校本日本書紀』（昭和四十八年、角川書店）。
(11) 折口信夫・西角井正慶・藤井貞文・鈴木棠三・波多郁太郎・藤井春洋・高崎正秀「神功皇后紀輪読」『國學院雑誌』第四十六巻第二号（昭和十五年二月、國學院大學）。昭和四十三年二月には高崎正秀の解題が付されて、『國學院雑誌』第六十九巻第二号に再録された。また『折口信夫全集』ノート編第九巻にも収められる。
(12) 佐伯有吉編『増補 六国史（日本書紀）』（昭和十五年、朝日新聞社）。
(13) 植松安『註釈 仮名の日本書紀』（昭和十五年、大同館書店）。
(14) 現存する「仮名日本紀」の諸本については、同前掲註13、中村啓信『神道大系古典註釈編二』日本書紀註釈上（昭和六十三年、神道大系編纂会）、拙稿「荷田春満自筆幹事仮名交じり「仮名日本紀」の位置づけ―諸本との比較から―」『文学研究科論集』第三十四号（平成十九年三月、國學院大學大学院文学研究科）などを参照。
(15) 折口信夫「國文學の發生（第三稿）」『古代研究』（昭和四年、大岡山書店）。引用は『折口信夫全集』第一巻に拠る。
(16) 同前掲註（15）。
(17) 池田弥三郎『折口信夫―まれびと論』（昭和五十三年、講談社）において、まれびと。
(18) 引用は、日本古典文学大系『古代歌謡集』（昭和三十二年、岩波書店）に拠る。
(19) 確実な「まれびと」は『徒然草』にみえる「まれ人の饗応なども」（二三一段）であり、稀に来る客人を指している。
(20) 武田祐吉・今泉忠義編『国文六国史』（昭和七年、大岡山書店）。武田祐吉『日本古典全書 日本書紀』（昭和二十三年、朝日新聞社）。
(21) 武田の『日本書紀』訓読については、拙稿「武田祐吉の『日本書紀』研究―新出資料と著作を通して―」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第二号（平成二十二年三月）参照。